

メディアファイロソフィー

第二回 春は（いじめ）の季節

高田明典

春が来た。イラク戦争から五年目の春が来た。多くのものを破壊し、多くの人を傷つけ殺している戦争も、命の息吹が香る春が蘇ってくることだけは、どうすることもできなかった。¹ どうして戦争はなくならないのだろうか——もちろんこれが問い損ないとなるのは、それが青臭いからではなく、理由を聞くという形式であることによる²。

春はまた、進級や進学の手帳でもある。新しい学校や職場やクラスに仄かな期待と大きな不安を胸に抱きつつ、息を殺して日々を送る人たちが街を行き交う季節である。人との新しい出会いがあれば、そこに摩擦や軋轢も発生する。それは当然のことであり、誰もが乗り越えていかななくてはならないものだろう。しかしながら、個人の力で乗り越えることが難しい関係が発生してしまつことも、ままある。

誰もが悪いと感じていることが簡単にはなくならないというのは、この社会の一つの大きな矛盾である。もちろんそれは、「それを維持する力」「その発生を支える力」がどこかに存在しているからに他ならない³。人間関係における摩擦や軋轢は当然存在するし、ある人に対しての嫌悪感や忌避感が生まれるのも当然のことだろう。そういうことが問題なのではない。その個人的な嫌悪感や忌避感が、集団の力に仮託されたときに「いじめ」となるからだ。私たちは、「いじめ」という現象には敏感かもしれないが、その維持と発生を底で支えている力に関しては、あまりに無頓着だ。

あまり賢くないようなタレントや若者がよく口にする言葉に「空気が読めない」というものがある。「空気読めよお〜」とか「空気読めねえなあ〜」などと使用される場合が多い。下劣な言葉だ。ここで「空気」とは、その場が持つている雰囲気や方向性のことを指すものとして使われている。それは表面的には「場の方向性に従え」という意味をもち（それも最悪だが）、さ

一 菊池寛『勳章を貰う話』冒頭による。「春が来た。欧州戦争第二年目の春が来た。すべてのものを破壊し、多くの人類を殺傷している戦争も、春が蘇ってくるのだけは、どうすることもできなかった。」周知のとおり、菊池寛は文藝春秋社の創設者。連載初回は文豪である夏目漱石へのオマージュで始めたが、第二回は当然、菊池寛で「いじめ」。

二 いわゆる「Why」の質問には答えられない。少なくとも科学的であろうとする場合も、実効的な質問とする場合は、「How」の形式でなければならぬ。つまり、「どうすれば戦争をなくすことができるのか」という形式になって、初めて意味を持つ。これは、構造主義的な考え方の重要な立脚点でもあり、また、「何か有意義なことを行おうとする科学」が必ず知っていないなければならない考えかたである。

三 社会と個人の関係を扱う研究者の中心的な問題意識はここに存在している。ブルデューはそれをハビトゥスと呼び、ルーマンはゼマンティック（意味）、ハーバーマスは「クルツール（文化）」、ギアーツは「文化的プログラム」と呼んだ。

らに実際には「この私が好ましいと考えている、この方向性に従え」ということを「場の力」に仮託して強制していることに他ならないからだ。

ゴフマン^四は相互関係秩序という概念を用いて、「場の空気」が発生し固定していく様子を説明する^五。二人の人間が出会ったとき、お互いに相手が「何者であるか」を探りながら会話を行動が進行する。知り合いであっても同じことだ。相手が何を考え、何を好み、ある話題をどう評価しているのかを探りあいながら、次第にお互いの立ち位置を確保していく。

双方の意思に端を発しつつも、そこにはそれを越えた力が発生する。一つの言葉は相手に影響し、相手の言葉や態度が微妙に変化する。それによってまた私の態度や言葉が影響を受ける。受け、応え、さらにまたそれらの受け応えが新たな方向性を持ち、それぞれのプレイヤーに影響する。ジャズのように——場の空気は存在するものの、しかし、ここでは誰も「空気を読め」とは言わない。それは暗黙の了解であり、命令したり言葉にしたりすることではない。少々音が外れようと、リズムが崩れようと、スイング感が損なわれようと。

少し堅物がいてそのような指摘をしたときは、小声でこう反論するのが常だ——まあね、だけれどジャズじゃないか——。軍楽隊でも古典音楽でもないからね。場の空気を大事にするのは、そこにいる人が大事だからだ。枠組みは大事だが、それぞれの個人よりも大事な枠組みなどない。枠組みや規律が大好きなら軍楽隊に入ったほうがいいよ。

個人の力は限りなく小さく弱い。私たちは関係にもたれあつて生きていくしかないひ弱な存在だ。しかしそのひ弱な人間も、なにがしかの共同体に不承不承でも属しながら、意志を持ち、感情を持ち、(普通は)幸福を追求する。私たちは自分が幸福になるために、もしくは、自分の欲望や欲求を充足させる手段として利用するために、共同体や社会という仕組みを作り上げた。だから、その共同体を自分のために利用しようとする人間がいても不思議なことではない。というよりも、むしろ人はそうやって生きている。

しかし一方で、奇妙な現象が存在する。その目的が不明な行動が横行している。それが「はじめ」だ。そこにどのような利得や目的があるのだろうか。誰かを嫌悪し、忌避することによる「利益」とは何だろうか。私にはわからない。

石川忠司^六は、その著書『極太!! 思想家列伝』において、現代の底辺層の若者の多くは「まっとうな欲望」を持っていないゾンビなのだ指摘する。コミック『ドラゴン桜』が底辺層の若者に「欲望と手段との関係」を教えるという構成となっているのは、「彼らがそれを知らないからだ」と言う。欲望を満たす手段を知らないから、もしくはそもそも「まっとうな欲望」を

^四アービング・ゴフマン (Goffman, Erving)。米国の社会学者。「ゴッフマン」と促音つきで表記される「ゴッマン」。「ゴフマン社会学」とも称される社会学の新しい潮流を生み出したことで知られる。

^五佐藤毅(訳) 折橋徹彦(訳) 『出会い—相互行為の社会学』 誠信書房 一九八五

^六 文芸評論家 『現代小説のレッスン』 講談社 二〇〇五年、『衆生の論理』(筑摩書房、二〇〇八年) などで知られる。最近出た『新・龍馬論』は特に面白い。先日池袋で飲んだときに、来年(二〇一一年)から東北芸術工科大学の教授になると聞いて驚いたばかり。「大学」という組織の嫌なところをたくさん吹き込んでおいた。来年から山形に住むらしい。寂しくなるねえ。

持つていないから、誰かを嫌ったり忌避したりという何の利益もない行動に血道をあげることになる。

近代的自我とは、個人の欲望の発生によって説明される。もちろん欲望そのものは前近代にも存在した。近代においては、欲望は個人ごとに個別のものとなり、それを処理するのも個人の決定と責任において行われることとなった。デカルトの「*cogito ergo sum*」(考える、ゆえに、存在する)という言葉が近代的自我の発生を示す宣言であるとされ、「自己の实在の証明」がその中心要素であると言う人は少なくないが、それは決定的な誤解である。「私は考える、したがって、私は存在する」と解釈されて紹介されることの多い言葉だが、これは「私の思考が存在する、したがって、私が存在する」と言っているに等しい。「私の鉛筆が存在する、したがって、私が存在する」というものと同じだ。これで証明だと言ったら、きつとデカルトにもふつとはされる。

デカルトは「思考は私のものである」と主張したのであって、それは決して存在論的な自己の实在証明などではない(比較的専門に近い人であってもこれを誤解している場合が多いのは辟易とする)。そしてこの「思考」とは個別の欲望を現実化するための手段であるから、個別のものとなる。もしも欲望が同じであるならば思考の出る幕はほとんどない。祖父や父や兄弟や仲間と同じ欲望を充足させたいのであれば、同じことをすればよい。そのとき思考が果たす役割は著しく小さい——人と異なることをしなければならぬからこそ思考が必要となる。フロイトの偉大な業績は、欲望と、それを抑圧する仕組みについての画期的な図式^二を提示したことにある。もちろんそれは時代の要請によるものだ。個別の欲望が発生し、同時に、それを規制し抑圧する仕組みも存在している。自我とは、欲望と規制の境界面に発生する概念である。恐ろしい。逆に言えば、欲望(リビドー^三)も規制(超自我^三)も、どちらも「私」

^二 詳しくは拙著『構造主義方法論入門』(夏目書房)の付録を参照のこと。とは言っても、版元営業停止で、入手は難しいが。

^三 連載第一回の「近代的自我」の脚注を参照。

^四 丸みらいに言えは、ルーマン(Luhmann, Niklas)によれば、人が自由に思考し行動することによって世界の複雑さの度合いが大きくなり、その複雑さを縮減させることによって対処するために、社会が生まれることになったという。

^五 シグムント・フロイト(Freud, Sigmund)。精神分析学の開祖。

^六 こゝをゆる「無意識」の構図の二つ。

^七 「*Libido*」とは性的なエネルギーのことであるが、むしろ「生のエネルギー」と考えたほうがよい。つまり、「生のエネルギー」が個人において具現化されるとき、それは「性的エネルギー」となる。

^八 「*Über-Ich*」つまり、自分の上に位置し、自分を越えるもの。英訳で「*super ego*」とされる。自我は、フロイトの用語では「*das Ich*」もしくは単に「*Ich*」であり、代名詞「*ich*」(私)の頭文字が大文字とされているだけの表現。これを「ego」と英訳したのはすくなく才能だと感服。この英訳 ego があってこそ、フロイト心理学かといふ。

ではないということだからだ。「私」とは、「私」ではない欲望と、「私」ではない規制の、力関係の中に発生する架空の回路ではない。しかしフロイトはあくまでも「個」を重要だと考え、そこに「社会」や「共同体」という概念を組み込むことを巧妙に回避した。

その矛盾に気付き、フロイトが（おそらくは）知りつつも敢て言わなかったことを自らの理論に組み込んだのはユング^{二四}である。ユングは「集目的無意識」という概念によって、「個」ではなく「共同体」が重要な役割を担っているということを描いた。「重要な」というレベルではない。むしろ共同体こそが人であるという。

フロイトがユングと訣別した理由には諸説があるが、敢て隠してきたことを正面切って主張されたとき、フロイトは激昂したに違いない。ユングはフロイトと併記されることもある二人の偉大な思想家であるが、その思考の方向性は真逆である。

あらゆる思想も理論も、「真理」に近づぐためのものではなく、人を幸福にするためのものであるはずだ。近代的自我が確立されることが「幸福への筋道」であると考えるならば、ユングはあまりにも迂闊に世界の実態に目を向けすぎた^{二五}。世界があるがままに解釈することではなく、世界認識の方向性を提供することが思想の目的である。ユングは正しいが、フロイトによって提示された「個別の欲望」の重要性を、いとも簡単に前近代の認識枠組みに戻してしまった^{二六}。しかしそれもまた時代の要請であったのだろう。

欲望と手段のセットが崩壊したとき、決して充足されることがない剥き出しの欲望だけが存在することになる^{二七}。常に不満をもち、常に充足されない。充足されない欲望は還流し、出口の無い無意識の世界に滞留する。近代的自我という理念のもと、もしくは個性という美名のもとで、個別の欲望を持たされ、しかし現美化のための手段を持たされないままにその梯子を外

二四 カール・グスタフ・ユング (Jung Carl Gustav)。分析心理学の開祖。

二五 現代でもいわゆる「ユング派」と呼ばれる分析者の著作には如実にその片鱗を見ることが出来る。同じ「白雪姫」を対象とした物語分析であっても、フロイト派のベッテルハイムは「個」としての人間のありさま（成長の不安）としてそれを分析するのに対し、ユング派のビルクホイザー―オエリは、社会が持つ価値観（成熟を拒否する価値観）として分析する。

二六 個人の欲望は個人の思考こそが重要であり尊重されるべきだというのが、近代に発生し現代に至るまで（とりあえず）続いている価値観の主旋律である。たとえば現代思想における「主体問題」を例にとっても、個人の意志や思考が、いかに社会や世界（つまり「私」の外側）の価値観に影響されているかを問題にし、また、いかにしてそれらの束縛や影響から逃れることができるか（もしくは逃れることをもくろむことの意味なき）を中心的な問題としている。これは、ガタマー―ハバースマス論争の中心的な論点でもあったし、現在でも決着はついていないアポリアである。ユングは、この図式をいとも簡単に「世界の底流に存在する意味・価値こそが重要」という方向へと転換させてしまった。

二七 欲望は、それを充足するための手段を具備するとき、その手段によって飼いやられる。「女にモテたい」という欲望は、たとえば「自動車の運転免許を持つ」や「女にモテるようにする」や「金持ちになれば、女にモテるようにする」という手段が提供されたとき、一時的に陰を潜める。つまりサブゴールの存在によって、本来のゴールは包み込まれることになる。かくして「運転免許をとること」「金持ちになる」というサブゴールへの到達が目的とされ、当初の剥き出しの欲望は転化される。しかしそのような有効な手段が存在しない場合、剥き出しの欲望だけが存在することになる。たぶん現代の日本は、その段階

されて宙ぶらりんの状態になった人間たち。欲望を明確な言葉にすることのできない人間たち。スピノザの言う「マルチチユード（鳥合の衆 一八）の誕生だ。たとえ選良主義^{二九}と言われようとも、ネグリ^{三〇}ハートのようにそれに期待することはできないし、ましてや称揚するなど決してできない。なぜなら、理想を求めるために現実を捨てることは愚かだからであり、マルチチユードの愚かさによって不幸が蔓延しているのが現実だからだ^{三一}。ただし、ネグリ^{三二}ハートのこの期待は美しい。

「空気を読め」と言うことによって集団への同化を強制する。そして同化しない人間をいじめの対象とし、排除する。そんな無理筋が可能となるのは、多くの人間が「ひとりで生きていない」からだ。共同体は、それが「ひとりで生きている人間」が集まったものであるとき、もつとも健全なものとなる。ひとりで生きている人間、自立する人間、自分の足で立ち、個人名で仕事をする人間は、空気に抗することができるし、それがその共同体の力ともなる。そうではないから——ひとりで生きていないから——同化を強要することになる。ひとりはさびしいからね。

「ひとりで生きる」のは簡単なことではない。場の空気に抗して進むのは容易な決意ではなく、そこに発生する新たな摩擦を受容する覚悟がなければそんなことはできない。端的に言えば、「いじめはよくない」と指摘し、その場から立ち去ったり制止したりすることによって、自分自身が新たないじめの対象になる可能性が発生する^{三三}。その行動は、その共同体を捨てる覚悟によって裏打ちされる。つまりそのとき、新たに帰属できる別の共同体を有していることが重要となる。そうではないから、一つの共同体にいつまでもしがみつ়くことになる。共同体の代替を持たないとき、人は簡単に愚者となる。いわゆる「ムラの論理」だ。

そして問題は、若年層にこの前近代的自我の歪んだ尻尾が残っていることを、私たち大人が

一八 「multitude」は、ネグリ^{三三}ハートの本『マルチチユード（上・下）』で有名になった概念だが、もともとは『神学・政治論』でスピノザが使ったことでも知られる。さらにもとをたどれば、聖書でイエス・キリストが「民衆」を呼ぶときに使用していた言葉。前述石川忠司『衆生の倫理』の「衆生」は、この概念にとっても近い。

一九 ネグリ^{三四}ハートのこの考え方は、意外とウケが悪い。「有象無象の者たち」の力に期待するなどということには、どうも感情的に賛成できないというところ。つまり「エリート（選良）主義」。

二〇 アントニオ・ネグリ^{三五}＆マイケル・ハート（Negri, Antonio & Hardt, Michael）を組んで「（つ）つ（呼ぶ）」とがある。共著である『帝国』が有名。

二一 誤解を恐れずに断じてしまふなら、このような考え方を基礎に持つのが「啓蒙主義」。少なくとも二〇世紀の世界における学問の基本的な立脚点は、そのような啓蒙主義にあった。しかし、それで世界が良くなったのかというと、全然そんなことはなく、二十一世紀になってもまた戦争をやっているわけだからね。その原因が本当に有象無象の民衆にあるのか、それとも一部の選良にあるのか、よく考える必要がある。で、たぶん後者。しかし、選良たちに力を与えているのは、民衆。このような考え方をハマると、ラシエールの言うところの「民主主義への憎悪」につながるっていくことになる。

二二 中学生のときに、いきがかり上、そうなったことがある。武勇伝などでは決してなく、思い出すのも嫌なくらい、とても辛く悲しい経験だった。だから、それを誰にも薦めはしない。

どうにもできないということ。いや、むしろ大人の側にたくさん残っているということ。さらに言えば、恒常的にそれを発生させる仕組みを維持していることだ。もちろんその仕組みとは、自分で選んだのではない「学校」という名前の共同体に無理やり押しこみ、そのみずぼらしい檻の価値観を子供たちに強要していることに他ならない。自ら選んだのではないから、その価値は常に押し付けられたものとして認識され、その絆は束縛として認識される。しかし子供たちにとつて、この学校という共同体から逃れることは難しい。それは一方で「教育機関」でもあり、そこから逃れることは教育課程からの逸脱を意味するからだ。そして、教育課程からの逸脱は、「欲望を充足させるための大きな武器」を一つ捨てることを意味する。繰り返す——共同体の代替を持たないとき、人は簡単に愚者となる。

解決の道筋を付けるのは簡単だ。学校に行かないという選択肢を用意すればいいだけじゃないか。そして学校に行かなくても教育を受けることができるようにすればよいだけなのに、私たちの社会はそれができない。

「共同体に生きる」ということを学ぶ必要があるという意見ももつともだ。集団生活の中で、当然発生する摩擦や軋轢に対処する方法を学ぶ場所が必要であるということもそのとおりだ。しかしそれは今の日本の学校に期待できる機能ではない。学校でそんなことは学べない。そこでは決まらずに、せいぜい知識と技術の習得だけだ（すごく大事なことだ）。学校は社会の縮図などでは決まらずに、よく考えてみるとよい。強制的に集められた同年代の子供たちと、概ね社会性に乏しい少数の大人だけがいる共同体に何が起るのかと——そして何が起ったのかと。戦争がなくならない。誰もが悪いことだと思っているそれが簡単になくならないのは、この世界の持つ大きな矛盾である。しかしまた誰もが知っていることだが、それは、戦争を支える力がこの世界の底に存在していることに原因がある。人はそれを「必要悪」という醜い言葉で呼ぶ。もちろん言葉自体が醜いなどということはない——それを使う人たちの心根が醜いだけだ。そしてまたそのような感じ方を青臭い書生気質と呼ぶ人もいる。知的に誠実であることを諦めて斜に構えるのがよいのであれば、この世界に哲学はいらない。哲学は世界を斜めに見るための方法なのではなく、正面から見据え、問題を一つ一つ解決していくためにこそある。ただし、「いじめ」「さえなくす」ことのできない社会の一員である私がそんなことを論じるのは、あまりにも不遜なのだが。

石川の言うところの「ゾンビ」として学校に適応し、積極的もしくは消極的に「いじめる側」に加担した子供たちは成長し、「空気を読め」と叫ぶ悲しい大人になった。もちろん彼らも被害者である。

彼らは、この春も街を揚々と闊歩している。私は籠の中の鳥のごとく、それを指弾する声を空しく叫び続けることしかできない¹¹³⁾。

(初出 『文學界』二〇〇七年五月号)

¹¹³⁾ 菊池寛『動章を貫く話』末尾による。「彼は病院の廊下を揚々と闊歩している。籠の駒鳥はまた高らかに「二度鳴き続けた。」